

健康雑誌

雑誌の創刊ラッシュはいっぺんに衰えをみせない。いや、むしろ、これはもうブームではないかとさえ思わせる。大手の雑誌社は既存誌の臨時増刊号というかたちでまず読者の反響をみ、うまくいきそうだとすると創刊にふみきる。こういうやり方は以前からのものだが、最近はこれに加えて、既存誌でさえも編集方針を変え誌面を一新すると、創刊号と銘うつ。余談だが、雑誌を集めている図書館などでは、こういう場合、つまり明らかに同じ雑誌であるが創刊号が二つ以上ある場合、巻号をもって二つ以上に分けてしまうか、巻号にこだわらずに同じ雑誌とみなしてしまうかで、もめてしまったりする。

誌面一新創刊号が増える背景には、雑誌形態の変化、ということがあるのだと思う。その第一にはやはりビジュアル化。『フォーカス』がぐんぐん部数を伸ばしているという。電車の中でも『フォーカス』を手にした人をよく見かけるようになった。『フォーカス』かと思つてのぞき込むと、違う雑誌だったというケースも最近は出てきた。見る雑誌のために概して良質の紙を使い、大判化し、平とじになった。既存誌も多かれ少なかれ軌道修正を迫られるようになってグラビア頁を増やしたりするが、それよりもいっそ誌面を一新して創刊号としたほうがいいと

考えるわけだ。特に、あまり売れていない雑誌は、そうすることで買ってもらえるチャンスがひとつ増えることになる。創刊号といえはやはり、一度は読者が振り向いてくれるからだ。

それとは別に、既成の分野に斬り込んでいく、悪くいふと、「二匹目のどじょう」を狙う創刊号のほうも当然のことながら多い。最近では、テレビ番組のガイド誌が話題になった。また、読売新聞の十二月十三日付朝刊によると、今度は健康雑誌が「静かなブーム」であるという。出版科学研究所のまとめでは、「市販されている健康雑誌は現在十数誌。五十三年から今年十月までに点数は変わらず、部数だけは年平均七十万冊のペースで増加。昨年は八百五十万冊」に達している。その十数誌に加えて、この十月にベースボール・マガジン社の『ドゥ・バランス』、十一月に学習研究社の『壮健ライフ』、十二月には朝日ホームドクター社の『びいぶる』がそれぞれ創刊された。さらに来年の二月には『フットワーク』が、四月には『壮快』の姉妹誌『安心』が出るという。『健康家族』も誌名を『健康時代』と改題して、隔月刊から月刊に踏み切り、創刊号として売り出した。なるほど、ブームである。

そこで今回は、最近創刊された健康雑誌を、既存誌と比較しながらいくつか紹介してみたい。その前に、前記読売新聞からの引用。「この雑誌は、医師の側から見た従来の医学誌とは発想が根本的に違っているところに特徴が